剣（つるぎ）の軌跡

お酒

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

これは、とある少女の物語。

本来辿るはずのなかった運命の果てに、少女は闇を裂く一振りの刃となる。

目次

Mission-00 | 1
Mission-01 | 15
Mission-02 | 32
Mission-03 | 61

Ｍｉｓｓｉｏｎ―００

クロスベル自治州。その中心であるクロスベル市。
ゼムリア大陸に数ある都市の中でも近年稀にみる発展を遂げつつあるこの都市の北西に、《月の僧院》と呼ばれる遺跡がある。
切り立つ崖に面し堅牢な外壁まで備えた、もはや宗教施設というよりは戦のための要塞と呼ぶべき威容を誇っている遺跡だ。
複雑に入り組んだ内部構造と訪問者を阻む罠の数々は、成程、要塞と呼ぶべきものに相違あるまい。
だが、それでもここは宗教関連の遺跡に違いなかった。
入口から入ってすぐの大聖堂。
そこに鎮座する女神らしき石像と並べられた長椅子の列は、かつてこの場所で多くの信者たちが礼を拝したことの証明であった。
――これが、この遺跡の表向きの姿だ。
女神像の直上。そこに目玉を模した彫刻が施されている。

これこそがこの僧院の真の姿であり、現在、この大陸を震撼させている禁忌の正体であった。
目玉の彫刻の裏側に存在する、この僧院の真の礼拝堂というべき大広間は茫漠とした明るさに包まれていた。
その光源は蝋燭。床一面に並べられた、儚くも不気味な光点である。
――――――――――――――――――――……。
細々とした音の集合体が薄闇に染み透る。
それは、老若男女入り混じった大人数の声だった。
床の間隙に跪き、血走った眼差しで彼らは何事かをブツブツと呟き続けている。
何とも怪しい風体の人間たちだ。
頭から爪先に至るまで、一切の隙間なく黒いローブを纏うその姿は魔術師か呪術師という表現が何よりも似合っている。
――――――――――――――――――――……。
再び声。
彼らが一声発すたび、この〝場〟が徐々に、しかし確実に変質しているのだ。
広間に根差す闇が色を増し、床の星々を押し返す。
広間にこびり付く血臭が、より一層の酸鼻を極める。

広間の奥。この僧院を象徴する大鐘が、歪な光と共に鳴動し始める。
彼らが行っているのは、太古から今日までに積み上げてきた秘蹟――その全てをもって魔縁の域を侵そうという試みに他ならない。
彼らの本質は悪魔崇拝（サタニズム）。故に行うのは、贄を捧ぐサバトである。
儀式場の中央。彼ら黒ローブの一団を象徴する目玉の紋章の上に設けられた祭壇に、悪魔に捧ぐ贄が安置されている。
黒髪の美しい幼い少女であった。外見から察するに、年は十にもならないだろう。
一糸纏わぬ姿で身を戒められた少女の白皙には、至る所に青痣が浮かんでおり、日常的な虐待を臭わせている。
黒ローブの一人――おそらく幹部クラスの人間だ――が、ゆらりと少女に近付いた。
その懐から取り出したのは、炎を妖しく照り返すナイフだ。
銀色の輝きを弄びつつ、身体の上で拘束された少女の手元に宛がって――一閃。
乙女の柔肌は鋭い刃を抵抗なく受け入れ、溢れる生命の赤がみるみるうちにその量を増していく。
相当な苦痛がある筈なのに、しかし少女の顔に苦痛の色はない。
ただ、茫とした眼差しが虚空を彷徨うのみ。
溢れだす血液はいよいよ洒落にならない量となっていた。

祭壇の縁を伝って床に滴り落ちては、まるで生きているかのように動き出して魔の方陣を描き出していく。

その光景を前に、儀式はついに大詰めを迎えようとしていた。

朗々と、鬱々と、謳われる文言の数々は、空の女神を厭い悪魔を拝する呪詛の類に他ならない。

一語一節とその呪詛が繰られるたび、より明白により強大に、この〝場〟がこの世ならざるものへ変質を遂げていく。

その侵食は、心臓の鼓動に似ていた。

一つ鼓動するたび、この世とは位相を異にする悪魔の住まう領域——すなわち《魔界》が大広間に重なって映る。

鼓動が速くなるにつれて、大鐘の響きもその間隔を狭めていった。

彼らの悲願の成就は、近い。

贄としての運命にある少女は、内からこみ上げてくる嫌悪と恐怖の渦に翻弄されていた。

ここに来る前に大量に呑まされた碧い錠剤の影響だろうか、身体の感覚が極端に鈍く、手首を切り裂かれたことがまるで他人事のようにしか感じられない。

その一方で、霊的な感覚——少女自身に自覚はなかったが——は異常なまでの高まり

を見せていた。
少女は感じていた。
人の心にただ嫌悪と恐怖だけを植え付けるナニカが、すぐ傍で牙を噛み鳴らしていることを。
ぞぞ髪立つ悪意の奔流は、より一層の絶望を呼ぶばかり。
そんな少女の感情は儀式を加速させる促進剤となるのだ。
空間の鼓動の間隔が短くなる。広間の空気が腐り果てた臭気を帯びる。
〝その時〟を前に、黒ローブの下から覗く双眸が飽くなき妄執と我欲の果てに糜爛し始める。もはや彼らの姿は、少女の眼には人間には映らない。
彼らすべて、例外なく悪魔である。
今際を前に少女の胸に過ったのは悔恨だった。
何日、何カ月、何年。どれほど前のことかさえ分からないあの雪の日。
人とは思えないどす黒い〝力〟でもって、自分に襲いかかろうとしていた魔獣を惨殺した兄。
振り返ったその貌に貼り付いた鬼の笑み。
自分を守ろうとしてくれていたのに、別人に変貌した兄への恐怖から差し出されたその手を振り払って、背を向けて逃げてしまった自分。

そう、これはきっとその罰。もう自分はあの暖かい家に戻れない。
走馬灯のように浮かび上がった家族の残照が、少女の心に影を落とした。
——それが最後の一押しだった。
「——おおッ」
始めに感激に湿る吐息を漏らしたのは、一体誰だったか。
少女がいる祭壇の足元。そこに魔界に通じる穴が開いていた。
大きさはまだ人間の頭くらいだが、このまま時間の経過と共に大きさを増していくことだろう。
運命を告げる鐘の音のもと、彼らの悲願はついに成就したのだ。
そして——。
少女が堕ちていく。穴が大きくなるにつれてその速度が増していく。
少女が堕ちていく。常闇の彼方へ。
身体が半分ほど闇に飲まれたその瞬間に——。
(——リィン兄様!!)
轡を噛まされたまま最愛の兄の名を叫び、次の瞬間、少女——エリゼ・シュバルツァーはこの世から完全に姿を消したのである。

＊

波止場に立ち並ぶ、打ち捨てられた倉庫の一つ。
カビ臭い空気を引き裂いたその一撃は、雷よりも激しく鮮烈だった。
絶死の威力を秘めた突きを前に、下級の魔など生き延びられはしない。
悪魔の群れの一角を、一撃のもとに削ったのは肉厚にして重厚の極致だった。
大剣。それも大の大人の体躯さえ上回りかねない巨大さだ。
柄に施された髑髏が特徴的なそれを、軽々と扱ってのける者がいることなど俄かには信じられないことだろう。
舞踏のような軽やかさで《反逆》の名を冠す大剣を振るう銀髪の美丈夫の名はダンテという。
この近くのスラム街にて、便利屋を営む男だ。
「ハッ、どうしたテメェら。ガッツが足りてねえぞ!!」
暮れなずむ茜色を吸って妖しく輝く刃が真一文字に振るわれれば、それだけで五体の悪魔が根こそぎその命を散らした。
砂へと還った同胞の残骸を踏みしめて、ズルズルと引き摺るように距離を詰めてくる悪魔たちは、一様に鎌を携えた死神の姿をしている。

《セブン＝ヘルズ》。七つの大罪を司る地獄の刑吏たちだ。
一体一体の力は雑魚故に、こうして群れで攻めてくるのがこの種族の常套だった。
周囲を囲まれた死地と呼ぶべきこの場にあって、しかしダンテの蒼い双眸に怖れはない。
むしろ、その逆。
口角を愉しげに歪め、より一層の挑発を悪魔たちに投げ掛けた。
「C，ｍｏｎ．ｗｉｍｐ」
その言葉に激発したか、丁度ダンテの背後に回り込んだヘルズの一体が無防備な彼の背中に踊りかかった。
会心のタイミングで上段から振り下ろされた大鎌は、しかし熱い血潮で潤わない。
空振り、思わずたたらを踏んだヘルズの直上で、夕日より赤い外套がさも愉しげに踊る。
重力に従いながら構えた黒白の二丁拳銃。エボニーとアイボリーの冷たい銃口が告げる号砲が、ダンテの反撃の狼煙だった。
轟音に続いて絶叫。
この瞬間、悪魔にとっての悪夢が幕を開けたのだ。

＊

「……ったく。情けねえ連中だぜ」
憤懣遣る方ないという風情で、大剣《リベリオン》を納めるダンテ。
血腥いパーティは彼の好むところであったが、こうも張り合いがないと気分も萎えるというものだ。
ましてや、それが一月ぶりの仕事とあってはなおのこと。
彼らヘルズを従える《ヘル＝ヴァンガード》という個体でさえ、たった一太刀のもとに消滅した。
次の依頼の時はもう少し歯ごたえのある奴が来てほしいもんだと独りごち、そのまま倉庫をあとにしようとした時のことだった。
「――あん？」
魔の者特有のどす黒い気配。
ダンテが〝臭い〟と呼ぶそれが、再び倉庫に充満し始めたのだ。
かなり――強い。
「ハハッ。いいね、メインディッシュのあとにデザートはつきもんだ。」
すっかりやる気を取り戻したダンテの美貌に、凄絶な狩人の笑みが宿る。

背負う白銀の刃を抜き放ち、天井の穴の向こうに広がる茜色の空目掛けていつものように挑発を飛ばした。

「ほら、来いよ!! 俺はここにいるぜ?」

茜色に一点、黒点が生まれ夥しい魔力が集まりだす。

渦を巻き、バチバチと帯電すら始める高密度の魔力が、黒点を擬似的な空間の穴へと変容させた。

一瞬にして、大柄なダンテでさえ余裕で通り抜けられるほどに肥大したその穴から、一つの影が飛び出してきた。

その影の姿を、彼の優れた視力が捉えて——。

「——あん?」

先程と同じ呟きを知らず漏らし、ダンテは小首を傾げた。その影が人間の姿をしている上にどうも意識がないように見えたからだ。

「ありゃ、子供……それも女か?」

人の姿を取る悪魔がいない訳ではないが、そういった存在は相当に希少だ。

何せ、悪魔という種族は総じて人間を見下す傾向にある。つまるところ、わざわざ劣る存在の姿を真似る必要などないだろうというのが悪魔の一般的な考えだ。

故に人型の悪魔というのは、変わり者か人間に取り憑いた弱小の種族がほとんどだ。

だが、それでは矛盾が生じる。
先程、空間に穴を開けた魔力の強さは断じて弱小のものではなかったし、取り憑くなら力の弱い子供ではなく大人を選ぶ筈だ。
ならば、大悪魔かと問われればこれも否だ。
現在封印されている魔界から人間界(こちら)に来られるのは、結界をすり抜けられる弱小がほとんどだからだ。よしんば来られたとしても、何某かを媒介に一時的な具現しかできないはずだった。
そういった事情故に、その慧眼をもってしても正体を測りかねているのだ。
「あー、何だろうな。前にも似たような光景を見た気がするぜ」
落ちてくる姿に既視感。
例えばミヤザキのジャパニーズカートゥーンか、はたまたテメンニグルの中腹か。
ともあれ、やることは決まった。
「可愛らしい雨を受け止められるなんて男冥利に尽きるな」
そんな諧謔を弄しながら、ダンテは己が内に眠る力を解き放った。
瞬間、ちょうど倉庫の天井から侵入してきた少女の落下速度が緩やかになる。
《クイックシルバー》。かつて時を操る馬から奪った力である。
久しぶりに使う力がうまく発動したことに内心安堵しつつ、コマ送りのような世界を

変わらぬ速度で歩みだすダンテ。
羽毛のように軽やかに降りてきた小さな身体を、確と抱きとめたところでちょうど時間切れだ。
「う、おっと」
両腕にかかった負荷に顔を顰めつつも、抱えたものだけは放さなかった。
「Ｈｕｈ．食後のデザートにしちゃ、ちょいと刺激的過ぎるな」
その少女は裸であった。
曝された裸身は雪のように白く、しかし全身に浮かぶ青痣が痛々しい。
ダンテの脳裏にロクでもない考えが過るが、一先ず置いておいて自身の赤いコートで彼女の身体を包んでやることにした。
「……」
腕の中で眠る少女は、見れば見るほど奇妙であった。
こうして直に接しているというのに、彼をして悪魔か人間か判断できない。
最も考えられる可能性としては、旧知の女デビルハンターの父親のように、後天的に悪魔の力を手に入れた人間であろうか。
見たところ十にも満たない子供が自ら黒魔術の類に手を染めたとも考えにくいので、おそらくはモルモットにでもされたか。であれば、先程見えたあの青痣はきっとそうい

うことなのだろう。
子供に過酷な運命を突き付けた下衆への怒りはあるが、先に考えるべきはそんなことではない。
この少女をどうするか、だ。
「それにしても……」
実に将来が楽しみな美少女だ。惜しむらくは金髪（このみ）ではないことか。
名も知らない少女の自我が悪魔のそれに染まっていないことを祈りつつ、ダンテは己が愛剣の柄に手を掛けた。
少女の口が動き、何事かを呟いていた。
「――――――――い」
蚊の鳴くような声。
あまりに微弱過ぎてダンテでさえ聞き取れない。
「――――なさい」
口元に耳を近づけても、まだ全容を聞きとるに至らない。
息を殺して、さらに身を屈めてダンテはその言葉に耳を欹てる。
「――ごめんなさい」
それは、謝罪の言葉。

意識のない少女が、しかしそれ故に混じり気のない想いを呟いていたのだ。
少女の、今は閉じられた両目の端から〝涙〟が一筋零れ落ちる。
「……」
それを前に、果たしてダンテが抱いた想いは一体どのようなものだったのか。
「……まあ、たまにはこんな展開も悪くないか」
苦笑し、リベリオンを放した手が少女の小さな身体に回される。
そうしてダンテは、久方ぶりに一人ではない家路に着いたのである。

Ｍｉｓｓｉｏｎ—０１

「ほら、さっさと起きて下さい!!」
凛とした少女の怒鳴り声が、寝室の静寂を打ち破った。
直後、一気に開け放たれたカーテンの外から、眩いばかりの日光が照りつけてくる。
時計の針は長針短針ともに十二の文字に重なっている。正午だ。
「……悪いが、今日は休業だ」
事務所の主たる男はそんなことを言いながら、差しこむ日光と少女から逃れるようにますます身を縮めて布団を被る。
身体を思い切り揺さぶられるものの、彼はまどろみに逃げ込むべく頑としてベッドに齧りつく。
彼——ダンテにとって、この時この瞬間に限って言えば、この少女はどんな悪魔よりも手強い小悪魔に違いなかった。
「……そう、どうあっても起きないつもりですか?」
少女——エリゼ・シュバルツァーの声音が不機嫌のそれに変わる。
彼女の心は複雑だった。

恩義——成程、とても言葉では言い尽くせないほどに感じている。
親愛——名前以外の一切を覚えていない自分にとっては、紛れもない心の拠り所だ。感じないわけがない。
だが、そんな少女の想いすら吹き飛んでしまうほどに、この男の怠けぶりは筋金入りだった。
曰く、週休六日制。
なんとふざけた言葉であろうか。
当初はその意味が分からなかったエリゼであったが、意味を知った時の彼女ときたら、日頃の嫋やかさは何処へやら柳眉を逆立てて叱りつけたものだった。
幼い彼女なりに彼のことを思ってか、保護者を気取って面倒を見るのがこのところのエリゼであった。
そんな彼女の事情を知ってか知らずか、ダンテの傍若無人ぶりは留まるところを知らない。
「そうだな、キスの一つでもしてくれるって言うなら起きるかもな」
頭上で嘆息。
これは勝ったかとダンテが思ったその時のことだった。
カチャリ、と冷たい金属音。

疑問に思い、閉じた瞼を開ければ、そこには己を睨む愛銃（エボニー）の冷たい銃口が――。
「――さて、どちらか選びなさい。鉛弾とキスするか、それとも素直に起きるか」
「見目麗しいお嬢さんとのキスは選択肢にないのかい？」
「……」
素敵な笑顔だった。
それはもう、彼をしてベッドから飛び起きるほどに。
「……オーライ、降参だ。流石に鉛弾とのキスは勘弁だ」
「もう……始めからそう言えばいいのに」
唇を尖らせる少女の眼の前で、ベッドから降りたダンテの裸の上半身が白日に曝される。
それは一種の肉体美。
徒に筋肉を溜めこむのではなく、幾多の戦いの果てに無駄な肉を削ぎ落として絞り込んだ〝極み〟とも言うべき美しさである。
当初は赤面して顔を背けたものだが、今となっては慣れたもの。ましてや、この男の日頃の姿を知ってしまえば、神々しさ美々しさはもはや皆無である。
「食事は用意してありますから、すぐに降りて来て下さいね？」
そう告げてドアノブに手を掛けたエリゼの背中に、ダンテから余計な一言が投げ掛け

られる。
「ヘイ。そういやお前さん、随分とアグレッシブになったな。俺の教育の賜物かね？」
「……ええ、おかげ様で。見習うべき人間と、そうでない人間の区別がつけられるようになったことには感謝致します」
寒気のする笑顔で毒を吐いて、今度こそエリゼは寝室から出て行った。

＊

ダイニングに用意された昼食あるいは朝食は、ピザを主食とするダンテにとってかなり健康的かつ質素なものであった。
バター塗りのトーストにベーコンエッグ、そしてサラダ。
十にも満たない子供が用意したものとしては間違いなく上々と言える品々に舌鼓を打ちつつ、しかしダンテの脳内に現在の生活を改めるという発想はない。
とはいえ、全てを居候——それも子供に任せるなど流石に沽券に関わるので、食器の片付けくらいはやるようになったのだが。
エリゼが買ってきた何とも愛らしいエプロンを着用し、黙々と食器を磨くその姿に〝悪魔も泣き出す〟とまで謳われた威厳はない。

というよりも、そもそもが卑怯なのだ。
上目遣いで着てくれとせがまれては、例え自分のようなクールガイであろうと落ちる。そうに決まっている。
知己の人間にこんな姿を見られていないことだけは不幸中の幸いであろう。
「……女運は相変わらずか」
額に銃弾をぶち込まれるわ、雷撃を浴びせられるわ、気ままな生活が出来なくなるわ。
己が不運を煤けた背中で語りつつ、銀髪の偉丈夫はふと、図書館に行くと言って出て行った黒髪の少女に想いを馳せた。
あの出会いから早二ヶ月。結局彼女が何者なのかは分かっていない。
記憶がないという彼女は、幸いと言うべきか名前だけは覚えていたので、情報屋兼仲介屋のイタリア生まれの豚を不本意ながら頼って、しかしその結果はすべて空振り。
警察への捜索願はもちろんのこと、戸籍及び飛行機の搭乗記録などなど。
黒い手段まで使って調べ上げたそれら一切に、〝エリゼ・シュバルツァー〟という名前は引っ掛からなかったのである。
自分が何者かも分からない恐怖に幼い少女が耐えられる訳もなく、泣き叫ぶ彼女を必死にあやしたのは今となってはいい思い出だ。
……思えばあの瞬間から、あの少女にペースを崩されてきた気がする。

食器を片し終わるやエプロンを適当にソファに投げ出して、事務所の方に顔を出した彼を迎えたのは、かつての面影などない整然とした室内だった。
常ならばハードロックの狂騒を奏でる古びたジュークボックスは、今は電源を落とされ隅に追いやられている。
壁に剣で打ちつけられて装飾品となった悪魔の依り代の数々は、そのすべてが廃棄の憂き目にあった。
散らばっていたゴミも綺麗に除かれ、磨かれた床が跳ね返す夏の日差しが目に痛い。
はて、自分の事務所は果たしてこんなに広かっただろうか？
そんな取りとめのないことを思いつつ、ダンテは席に着いた。
そのままいつも通り机の上に両脚を投げ出そうとして、気付いた。
ピカピカに磨かれたこの机。僅かに水気が残っていることから、おそらくついさっき磨かれたのだろう。
振り上げたままの脚が所在なく宙を彷徨い、ややあって床に下ろされた。
〝合言葉〟の依頼は既に一月近く寄せられていない。
それは本来彼が忌み嫌う退屈なことだというのに、午睡を誘う穏やかさを決して不快ではないと感じるのは、少女との生活をそれなりに楽しんでいるからなのかもしれない。

だが、そんな生活も彼女の記憶が戻るまでのことだ。
とはいえ、それまでは事務所に住まわせるつもりである以上、選り好みをせずに依頼を受けるべきかもしれない。
そんならしからぬ考えを浮かべながら、彼は楽しげに笑った。
「Ｎｏｔ　ｓｏ　ｂａｄ（悪くない）」
そんなダンテの前向きな思考に応えるかのように、鳴り響く電話が依頼の到来を告げる。
「――Ｄｅｖｉｌ　ｍａｙ　ｃｒｙ」
すかさず受話器を取り上げて、高らかにお決まりの言葉を告げた。
二言三言言葉を交わして、その内容に表情を破顔させる。
「――Ｊａｃｋ　ｐｏｔだ」
おまけに報酬も悪くないときた。
であればよし。せめてもの感謝の証として弾丸をたらふく食わせてやろう。
まだ見ぬ哀れなサンドバッグを先に見据え、湧き上がる衝動のままに武器の詰まったギターケースを掴み上げた。

＊

図書館を訪れたエリゼは、今日も今日とて面白そうな本を求めて巡り歩くことにした。

白のブラウスに赤のフレアスカート。

経済的に余裕のないダンテが古着屋で適当に見繕ってきたものだが、元々の仕立てのよさと彼女自身が纏う気品が相まって、この上ないほど似合っていた。

「ダンテにしてはまとも」とは、彼の知り合いだというオッドアイの女性の弁だ。

（……今日はどんな本にしようかしら？）

本は好きだった。

世の文豪たちが書き連ねた物語に一喜一憂し、名だたる学会の権威が監修した学術書から知識を得、ジャーナリストたちが編集した雑誌でイマドキを追う。

様々な分野の本に触れて、すっかりその世界に魅了された彼女は今や立派な本の虫となっていた。

この日エリゼが選んだのは、おとぎ話や童話などの児童書を収めた書架だった。

シンデレラやフランダースの犬など、読んだことも聞いたこともないタイトルの数々に目移りしていまいそうになりながら——。

――努めて無視してきた違和感が脳裏を掠めた。

「……ぁ」

それはダンテにも伝えていないこと。

冷蔵庫やエアコン、テレビに二輪駆動のバイク。アメリカやニューヨークといった地名。

それらを見、そして聞いたときに感じた彼我の常識の乖離に他ならなかった。

始めは記憶がない所為かと思った。

だが、日々を過ごしていくうちに募る違和感が告げていた。

私の常識にこんなものはなかった筈だ、と。

奇妙なまでの確信であった。

しかし、自分でもよく分からない違和感を相談することは出来なかった。

同居人に気味が悪いと思われたくなかったし、記憶が戻れば解決する筈だと思ったから、この瞬間まで胸に秘めてきたのだ。

（――いけない！）

慌てて頭を振って過ったものを振り払い、逃げるように一冊書架から抜き出した。

ロクにタイトルも見ずに抜き出した一冊は、彼女もよく見知ったものだった。

『まけんしスパーダ』

それは、正義の心を持った一人の悪魔の物語。

＊

太陽を西の彼方に追いやるように、藍色の帳がその色を展ばし始めていた。

茜色と藍色のコントラストが美しい空の下、冷房に慣れた身体を苛む西日の強さを堪えながら、エリゼは一人家路を急ぐ。

思いがけず見つけたおとぎ話を何度も読み返しているうちにすっかり遅くなってしまった。

五分ほどの道のりを軽やかな足取りで歩く少女の胸には、借りた本が五冊ばかり抱きかかえられていた。

『まけんしスパーダ』

解説を加わえられたより学術的な本だったり、民俗学の視点から独自の解釈をした本だったり——要はその物語に関する蔵書から読みやすそうなものを借りてきたのだ。

一度に五冊までしか借りられないのが口惜しかったが、少女は傍目に見ても分かるほど上機嫌だった。

早く読みたい。

逸る気持ちを抑えて先を急ぐ足が、スラムの入口を通り抜けて――ピタリと止まった。

「……え？」

異常な静寂。わずか数十メートル先の大通りの喧騒すら届いてこない。

耳鳴りさえしてくる無音の空気が、夏とは思えない寒さを孕んで少女の肌を撫でた。

ゾクリ、と総身駆け廻る悪寒。

服を徹し、肌を突き抜け、魂を舐めて陵辱する魔境の冷たさだった。

夜の闇に建物の影。時間の経過と共に勢力を強める暗闇が嗤った気がした。

「……」

歯の根が噛み合わない。両脚が小刻みに震えだして言うことを聞かない。

借りてきた本をすべて地面に落としたことにも気付かず、少女は理解不能な異常にただ身を震わせる。

ふと、両の手に湿り気を感じて見てみれば、コップをひっくり返したようにぐっしょりと濡れていた。

汗、だった。

暑さだけでなく寒さでも汗をかくのだと、知りたくもないことを知った少女の表情がより一層の恐怖で塗り固められる。

空気が水中にでもいるかのように重く、濃縮された鉄錆の臭いを纏っていた。
何処かから臭いを運んで来たのではない。
アンモニアや硫黄と同じくそういう臭いの空気なのだと理解してしまうほど、暴力的で容赦のない臭気の濁流であった。
心臓が早鐘を打つ。これほど心臓の存在を身近に感じたことがこれまであっただろうか。
鼻腔に直接血液を流しこまれたかと錯覚してしまう臭いにむせ返りながら、エリゼは本を拾うことも忘れて壁を頼りに一歩ずつ歩いていく。
ここにいては危険だと、本能的に察していた。
笑う膝を無理矢理踏ん張り、なけなしの勇気を振り絞って角を曲がり——その先の光景に、今度こそ心が折れてへたり込んだ。
飛び込んできたのは、赤。
今にも消えてしまいそうな古い街灯の下で、地元の男たちが地面に力なく横たわっていた。
流れ出る赤が周囲を一色に染め上げ、彼らの生存の絶望を物語る。
凄惨な殺人現場。
猟奇的な光景を生み出した下手人たちは、しかし立ち去ることなくそこにいた。

人間ではなかった。
人間の身の丈を一回りは越える糸繰り人形たちが、刃物や銃器を得物に踊っていた。
もはや言葉を発さぬ肉体に刃を突き立てて臓物を引き摺り出し、眉間に銃弾を撃ち込んでは弾ける脳漿の音色を愛でる。
充満する死と陵辱され続ける死。
人の持ちうる悪意を、遥かに超越した悪意によって演じられる恐怖劇の舞台に他ならなかった。
「……」
この世ならざる悪意の発露。
初めて目の当たりにする筈のそれが、少女の奥底で眠る記憶の扉に爪を立てた。
瞬間、万力で締めあげられたかのように、凄まじい頭痛がエリゼを襲った。
痛みによって絞り出されるように、忘却の彼方に沈んだ記憶が次々と浮かびあがる。
浮かんでは消え、消えては浮かぶ泡のような過去の数々は、後悔と絶望に彩られた痛みそのものだった。
「――――そうだ」
全てを思い出した。
故に分かる。

あれら——人に絶望だけしか与えない、凝縮した闇の正体は——。

「——悪魔」

思わず漏れた呟きは、まさしく致命的だった。

ぐるん、と向いた顔無き顔が、新たな犠牲者を認めて嗤いだす。

（いけない!!）

迸る悪意をどす黒い魔力に変えて、人形たちが滑るように距離を詰めてくる。

振り下ろしの初撃を躱せたのは、奇跡に近かった。

寸暇の差で体を起こした少女がいた場所を、血に濡れる大鉈が切り裂いた。

血で濡れた刃とは、そして朽ちかけた人形によるものとは思えない一撃だった。

舞う破片と吹き荒ぶ斬風。そして、地面を抉る威力に肝を潰しながら、これまでの恐怖が嘘のようにエリゼは駆けだした。

胸を灼く焦燥に追い立てられるように、彼女が追い求めるのは赤の男の影。

ダンテが危ない——。

男の本業を知らないエリゼの背後で、蠢く闇が一際強い気配を放った。

瞬間、彼女の背筋を悪寒が舐める。

咄嗟に身を屈めた彼女の頭上を、走り抜けたのは殺意を伴った銃火の掃射だ。

間髪入れずに続けて飛来する刃の軌跡を視界の端で捉え、これを脇道に身を投げ出す

ことで躱した。
しかし、刹那的に命を繋いでも意味はない。
奴らが追ってくる気配をひしひしと感じながら、エリゼは《Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙ》の事務所に向けてひた走る。
植木を倒し柵を飛び越え、時には迂回して、されど後ろは振り返らない。
「ダンテ!!」
一息に駆け込んだ事務所に男の姿はない。
ならばと思い、見て回ったシャワールームにもダイニングにも寝室にも、彼の姿はない。
――一体何処に？
最悪の想像が胸を過った。
ここにいないのならば、一縷の望みに掛けて近くのピザ屋に行ってみるべきだろうか？
そう考えて再び事務所を飛び出し、直後、血相を変えて事務所の中へと後ずさる。
糸繰り人形が群れを成して事務所を囲んでいた。
「……い、いや……」
慌てて扉を閉めるのと悪魔の群れが押し寄せてくるのは同時だった。

扉と悪魔との衝突は拮抗さえしなかった。

「きゃあああああああああ!!」

勢いに押し負けた少女の身体が宙を滑り事務机に激突。

悪魔らの勢いはまさしく津波の如く、先頭の何体かが弾き飛ばされてエリゼの頭上を通過し、事務机の後ろにあった棚へと頭から突っ込んだ。

「……う……ぁ……」

視界の半分が赤い。

弾き飛ばされた個体が取り落とした鉈が、彼女のこめかみを裂いたのだ。

とめどなく流れる血が、彼女の美しい顔を凄絶に染め上げていた。

震える腕に力を込めて、立ち上がろうとする少女の赤い視界に、刃を携えた人形が映り込む。

——嫌だ。死にたくない。

震える唇は言葉を紡げず、ただか細い吐息を漏らすのみ。

しかし、悪魔に容赦や情けという概念はない。子供だろうが老人だろうが、殺して奪って犯すだけだ。

少女の恐怖を味わいながら、人形が錆びた刃を振り上げて——。

——何の抵抗も容赦もなく、その心臓を刺し貫いた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ―０２

その時、ダンテの表情にあったのは、彼にしては珍しい険しさだった。
久々の大物相手に大立ち回りを演じ、意気揚々と帰ってきたダンテ。
そんな彼を迎えたのは、スラムの街並みを闊歩する下級悪魔たる《マリオネット》の群れだった。
五年前に魔界の王を封印して以来、日を追うごとにこの界隈に姿を見せることがなくなっていった悪魔たち。その存在に怯え、逃げ惑っているのはそれ以降に住むようになった新参者たちだろう。
そんな彼らを守るように、古参の者たちが銃火で以って応戦しているが焼け石に水だ。
一体斃したときには、すでに二体以上増えている。
このままでは古参も新参も甚大な被害を被りかねない。
バイクから降りたダンテは、逃げる住民の波に逆らうように一歩踏み出し、一陣の赤い颶風となって駆けだした。
動きの軌跡すら映らない神速の体捌き。

次の瞬間、踊るしなやかな肉体が現れ出でたのは、ちょうど哀れな犠牲者を鮮血で染め上げようとしていた一体の直上だった。

長く、それでいて力強い指先がトリガーガードを絡め取り、二丁拳銃の威容を夜空の下に曝け出す。

マシンガンに匹敵するマズルフラッシュに連なる血染めの祝砲。

降り注ぐ弾雨を浴びて、人形が文字通りのスクラップと化した。

「逃げな」

事態をまだよく呑み込めていないのか、目を白黒させる粗野な男。

しかし次の瞬間には、肺に貯め込んだ空気を全て吐き出さんばかりに絶叫し、人の波へと溶けていった。

銃声と絶叫に魅かれたか、思うがままに暴れていたマリオネットの群れが一様に殺意を纏ってこちらに向かってくる。

標的から外された隙を上手く突き、古参の者たちも残り少ない人波に紛れて避難を始めたようだ。

「熱烈なアプローチは歓迎だが――悪いな、今はてめえらの相手をしてる暇はねえんだ」

同居人の無事を確かめたいと思い、さりとて逃げ惑う住民を見捨てることもできない苛立ちを起爆剤に、猛る戦意がダンテの背中に具現を果たす。

薔薇を咥えた髑髏であった。
どす黒い瘴気を吐き出しながら、煌々と双眸を紅く滾らせるその魔剣。
銘を《無尽剣ルシフェル》。
爆発する紅い剣を、その名の通り無尽蔵に生み出すこの魔具は、つい先程の依頼でぶっ飛ばした悪魔の魂が変化を遂げた代物だ。
髑髏の両脇から伸びる、翼とも鉤爪ともとれる装飾から生み出された剣を両手に持ち、彼が刻み始めたのは情熱的なタップダンスのステップだ。
「——まずはこいつを突き刺す!!」
それは、さながら貴公子の舞だった。
軽やかなステップに合わせて深紅のコートが翻り、その美貌に獰猛でありながら同時に蠱惑的な笑みが浮かんでいる。
乙女らはもちろんのこと、同性でさえ思わず足を止めて魅入ることだろう。
日頃の彼からは想像もつかない、生き生きとした典雅さだ。
「——真っ直ぐに、そして強く!!」
時には直接突き刺し、時には投げ、木製の身体に突き立っていく紅い剣。その様は咲き誇る徒花を思わせる。
剣自体の殺傷能力が低いためか、いまだ絶命しないマリオネットがその手の凶器を振

るった。
その刃がダンテに届く刹那、爆ぜた剣の爆風に内側から喰い尽くされて散華する悪魔の依り代。
「――角度を変え、時には大胆に!!」
一見してふざけた言動でありながら、その実悪魔を滅するための最善のみを選び取っている。
爆炎に巻き込まれて都合三体の頭部が消し飛んだ。
あらぬ方向に投げられたと思われた剣は、脇道から飛び出してきた加勢に突き立ち、後続もろとも破滅の運命へと追いやった。
攻撃自体の規模とは裏腹の殲滅能力は悪魔の跳梁を許さない。
「ブチ込んでやる!!」
狩人は踊る。
今ここにあるのは彼を主演としたダンスステージ。
端役は主演を引き立て、そしてただ消えていくのみである。
「――そして最後に絶頂を迎え、君は自由になる」
終幕。
場に展開された全ての剣が爆ぜ、人っ子一人いなくなったスラムの街に炎の大輪が咲

き誇った。

＊

赤い影が飛ぶ。

移動に長けた《トリックスター》スタイルの強みを最大限に発揮し、ダンテは事務所に向けて最短距離を突っ走る。

壁を走り、瞬間移動を乱発し、すれ違いざまにはぐれ悪魔を何体か斬り伏せ、タバコの吸い殻や薬物の包装が散乱する裏路地を一気に駆け抜ける。

悪魔の殲滅に二分。事務所までの移動に一分。

なんと長い三分間だったろうか。

ようやく辿り着いた路地の突当たりにある事務所は、襲撃間もない爪痕を刻み付けられていた。

扉が吹き飛び、砕けた窓や家財が路上に散らばるその様は竜巻に直撃されたかのようだ。

その惨状を前に、ダンテの顔にあったのは怒りでも後悔でもなく——疑念だった。

「——この魔力は……」

破壊された事務所を中心に、水底にいるかのような錯覚を覚える魔力の渦が広がっている。
重く圧し掛かってくる霊圧の凄まじさはたるや、常人であればこの場にいるだけで最悪死にかねないだろう。
大悪魔の位階に指を掛けようという者が間違いなくそこにいる。
「――ふうむ。うちの姫さんがお怒りか」
ダンテはこの魔力の持ち主に心当たりがあった。
吹き飛んできたマリオネットを身を屈めて躱しながら、彼はぽっかりと口を開けた入口を潜った。
照明のない闇の中、散乱する人形の残骸の中心にその異形はいた。
側頭部から前面へと伸びる、巨大かつ鋭利な角。
瞳は血を思わせる色に染め上がり、同じ色の第三の瞳が額を縦に割り裂くように顕現している。
漆黒の外殻が青白い肌を覆い隠し、背中の透き通った羽が震えながら碧い燐光を放つ。
そして、その碧い燐光を受けて外殻が濡れたように輝き、この世ならざる魔性の美を醸し出しているのだ。

夜の貴婦人。
そんな印象を見る者に与える艶麗な姿をした子供の悪魔だった。
「ヘイ、さっきぶりだなお嬢さん。ちょっと見ないうちに随分とグレちまったようだな——」
語りかける言葉は常のそれ。
いつも通りの軽妙な口調でジョーク混じりに語りかけ、
「——なあ、エリゼ?」
これ以上ない真摯な眼差しと声音でダンテは異形の名を呼んでいた。
返答は言葉ではなく白刃で以って行われた。
蒼く帯電する大剣による下段からの斬り上げ。
だが、技も心得もないただ力任せの一閃がダンテに届く訳もなく、次の瞬間には上段から振り下ろされたリベリオンがその刃を抑え込んでいた。
焼き切れた大気の臭いが鼻をつく。
見れば、エリゼの握る剣がリベリオンに抗うように一際強い電流を纏い始めていた。
彼女の体格に合わせて刃渡りが短くなってはいるが、それは間違いなくダンテの所有物だった。
「……へえ。アラストルか」

事務机の後ろの棚。
そこにいずれ質草にするつもりだった魔具を何点か保管してあったのだが、どうやら何らかの形で扉が破壊されてしまったらしい。
この雷を纏う魔剣も、元はその棚に保管されていたものであった。
「おい、エリゼ!! 俺だ、分かるか!?」
無言。
迸る稲妻に照らされて、紅と蒼の瞳が交錯する。
間近で見た紅の瞳に理性の色はない。
悪魔の力に呑まれ、〝破壊〟という悪魔の本能が剥き出しになっていた。
「……あー、こりゃ完全にトんじまってるな」
苦痛めいた微かな呻きを聞きながら、ダンテは押さえつけていた剣を一気に撥ね上げた。
途端、力の均衡を崩されて黒き異形が踏鞴を踏む。
そして、そんな隙を見逃すダンテではない。鼻先を掠めた雷刃に眉根一つ動かすことなく、一瞬にしてエリゼの足元へと滑り込み――
「――おらよ、っと!!」
巴投げ。

鮮やかなまでの手並みに理性のないままで反応できるわけもなく、エリゼの矮躯が扉のない入口から路地へと跳ね飛ばされた。

「オイオイ、いくらグレたからって自分の家で暴れるのはよくないぜ」

地面に突き立てた剣を支えにして起き上がろうとしていたエリゼに、投げ掛けられたのはそんな言葉。

「まあ、お前がそんなにもグレちまったのは俺の責任だしな。だから——来いよ、満足するまで語り合おうぜ？」

そう、これは己の失策。

いくらここ数年悪魔の数が減っていたとしても、自身が魔界にとって最大の仇である事実は揺るがない。

だというのに、油断があった。

狡猾にして陰湿な〝奴ら〟に心の隙を突かれた、その代償が今目の前にある光景だ。

だが、まだ清算できる。終わりではない。

双眸は真剣の凄みを宿し、言葉は冷然と語られる。

ニヤリと口角を吊り上げていながら決して笑んではいないその形相は、しかしどこまでも彼に似合っていた。

もはや怠惰な男はここにはいない。

「――Ｌｅｔ，ｓ　ｒｏｃｋ，ｂａｂｙ」

業火のような覇気を纏って、魔帝すら封じた最強のデビルハンターがそこにいた。

＊

果たしてそれは、地上に降りた奇跡だったのか。

とうに世界を染め上げた夜の闇を切り裂く無数の蒼い光条。

その軌跡をなぞるように雷が奔る様は、怖気を覚えるほどにこの世の常識から外れていた。

遠くから見ていたある者は言った。

雷の花が咲いた、と。

またある者は言った。

地上から天に雷が昇って行った、と。

人々の不安を掻き立てたその空の下、紫電と炎が織り成す舞台の上で赤と黒の影が激しく睦み合う。

「……ぁ……ァ」

細やかな呻きと共に、黒の影が一度その左手の剣を振るえば、その動きに追従して電

流が蛇の如くのたうった。
魔剣《アラストル》。
黒の影——エリゼ・シュバルツァーが振るうその剣は、操る者に電撃を操る力とスピードを与えるという。
彼女に剣術の心得はない。故に技も力に任せた稚拙なものだ。
だが、その速度だけは異常だった。
腕がブレたと見るや、次の瞬間には十を超える剣筋が夜に軌跡を刻み付けた。
人間には真似できず、そして人間には躱せないその速度は、まさしくアラストルの謂れの体現だった。
だが——。
「——ハッハァ!! どうした、もうバテてきたか?」
当たらない。届かない。
対する赤い影は、鼻先を剣が掠めるスリルを完全に満喫していた。
身を屈め、捻り、そして跳び越える。
明らかに無駄な動きさえ混じっているのに、剣どころかそれに連動する電流までもが空振りに終わる。
外れた電流は近くのゴミの山や廃車に着弾、二人のダンスを寿ぐ盛大な花火となっ

た。
己が得物たる白刃を抜くことすらなく、全て躱しあまつさえ前進してのける赤の影――ダンテ。
吹き荒ぶ剣風が自発的に彼を避けているようにさえ見えるその様子は、さながら台風の目だった。
五体満足のまま生を謳歌する男の姿に、理性のない筈の少女が今、確かにたじろいだ。
「……どうした？　まだ終わりじゃないだろ？　溜まっちまったモン、全部吐き出せよ？」
その囁きはすぐ耳元で。
いつの間にか距離を縮めたダンテが目の前にいた。
「……ッ……」
エリゼから魔力を吸い上げ、一気に輝度を増した雷光は当然のようにダンテには届かない。
右足を軸に身を翻しただけで容易く背後を取られた。
「Ｇｏｏｄ．それでいい」
言葉による揺さぶりと彼女の魔力の枯渇を狙うダンテの口角が、より一層吊り上がった。

「——さて、いい感じに温まってきたことだしここは一つ、もっと激しい夜のダンスと洒落こもうぜ？」

言うなりその身が再び翻り、その流れのままにリベリオンの白刃が抜き放たれた。

直後、同時に放たれた真一文字の薙ぎ払いが中空で絡み合う。

無論、それだけでは終わらない。

真っ向からぶつかり合う刃の応酬が次々と火花を生み、鋼が奏でる高らかな響きが両者の聴覚を圧する。

一合切り結ぶ度にダンテの肉体を電流が駆け抜けるが、もはや一切頓着していない。

むしろ程良い刺激と感じながら、相手を振り回すべくより激烈に剣舞を刻むのみである。

「いいねぇ、いい感じだ。ノってきた」

右側方からの横薙ぎには左側方からの横薙ぎを。

左脇からの袈裟懸けには右脇からの逆袈裟の斬り上げを。

反対方向からの剣閃が全ての太刀筋を斬り落とす。

果たして、それからどれだけの剣閃が踊ったのか。

当人たちにさえ分からない剣の演舞についに終わりが見え始めた。

「……ア……ゥ……ダ、ンテ……ダンテ……」

いつしか口から漏れる呻きには生気が宿り、それに伴って剣と魔力の暴威が目に見えて衰えていく。
「ふむ。あと一押しってところか……」
どのようなノックが一番効果的だろうか。
そう思案するダンテの前に、期せずして答えが現れた。
一閃。
当初の速さなどもはや見る影もない突きが迫っていた。
「ＢＩＮＧＯ!!」
我が意を得たり。
そう笑ってダンテは諸手を大きく開いて――。
「――Ｃｏｍｅ　ｏｎ!!　キスしてやるぜぇ!!」
何の抵抗も躊躇もなく、冷たい刃を己の心臓に受け入れていた。

＊

夢から醒めたような心地だった。
ふわふわと頼りない身体の感覚も紗がかかった意識も、適度な酩酊感に包まれて実に

気分がいい。
しかし、そんな心地よさも時間の経過と共に薄れていく。
徐々に鮮明になる感覚が、まず始めに左手に握られた硬質な手応えを捉えた。
「……？」
馴染みのない肌触りを上塗りするように次いで感じたのは、異様に滑る液体の感触だった。
何事かと思い、左手を顔に近づけた途端に鼻腔を刺す濃密な鉄の臭い。そして、ぼやけた視界の中で、やけにくっきりと映る紅色が血であると告げていた。
「……え？」
急速に焦点が合わさった視界に映る赤い男の影。
胸には大剣の威容が突き立ち、溢れる血が刀身を伝っては零れ落ちている。
「——え？……嘘……え？　どうして……一体、誰がこんな……？」
どうして？　誰が？
問うまでもない。
手にあった馴染みのない硬質な手応えは剣の柄。今も手に纏わりついている彼の血液。
「……よう、エリゼ。機嫌は直ったか？」

致命傷を負いながら、しかしいつも通りの笑みを浮かべるダンテのその言葉。
それらが意味するところは即ち――。
「――私？」
あり得ない。
大恩あるこの男性を、一体どういう理屈と因果があれば殺すに至るというのだろう。
悪魔に襲われてから、今に至るまでの欠け落ちた記憶が少女の恐怖と混乱に拍車を掛ける。
こみ上げてきた酸味を抑えようと口元に手をやって――その異常に気付いた。
「……何、これ？」
真っ黒な手だった。
手袋でもしているのかと思ったが違う。
そう認識した瞬間、冷水を浴びせられたように、恐怖と混乱に支配されていた思考が停止した。
停止したが故に他の異常を鮮明に感じ取った。
まるで、眼がもう一つ増えたかのように視界が広い。
背中に腕が生えているかのような違和感を感じ、試しに力を込めてみれば身体が宙に浮きかけた。

「――――――――ッ!?」

悪寒が総身を舐めつくした。

おそるおそる持ち上げた視線の先、異様なまでによく見える〝眼〟がダンテの双眸に映る異形の姿を捉えて――。

「……いや。いや、いやあああああああああああああああああ!!」

再び恐怖が爆発した。

「おい!! 落ち着けエリゼ!!」

心臓に剣が刺さっていながら息絶える気配のないダンテの言葉は、恐怖と混乱の極致にある少女には届かない。

異形のままの少女の身体が突き動かされるように飛翔し、あっという間に夜に溶けて見えなくなった。

「……やべぇ。ミスっちまったか?」

ノックがあまりに強すぎたようだった。

冷静に考えてみれば、見知った人間を刺して平静でいられる人間などそうそういる訳がない。

「――よし。まだ追えそうだな」

幸いにもまだ気配は消えていない。

己が不明を悔いつつ、家出娘を連れ戻すべくダンテの姿が霞と消えた。

＊

波止場に立ち並ぶその倉庫で、少女はただ一人泣いていた。

人間の姿に戻り、隅の方で涙に暮れるエリゼの口から漏れ出すのは、同じ音の羅列だった。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

壊れた機械のように垂れ流す謝罪の言葉。

聞く者はなく、倉庫に沈殿する薄闇と静けさに吸われて消えた。

押し潰されそうな罪悪感から逃れる術はなく、同時に逃げてはいけないと理解しているからこそ、無心に謝罪のみを口走っていた。

父母の温かさを覚えている。

きっと彼らは愛娘の喪失を嘆いていることだろう。情愛の深い人間だったことをよく覚えている。

兄の頼もしさを覚えている。

あの雪の日に魔獣から自分を守ってくれた彼。差し伸ばされた手を振り解いた瞬間

の、彼の愕然とした表情をよく覚えている。
赤の男の不器用な優しさを覚えている。
夜、寝付けなかった自分が完全に寝入るまで、決して眠ろうとはしなかった彼。いつもと同じように笑う彼の胸に、剣が刺さっていたことなどつい今しがたの出来事だ、忘れる訳がない。
愛すべき彼らを裏切り、傷つけ、挙句の果てに殺してしまったのは一体誰か？
無論問うまでもない。自分だ。
大切に想う人を裏切ってきた自身と、こんな悪魔の力を植え付けたあの人間たちを呪わずにはいられない。
もういっそのこと、自分はこのまま消えてしまった方がいい。
そうした心理の働きがここに足を運ばせたのかもしれない。
彼と出会ったというこの倉庫からならば、何処へなりと消えることができるのではないかと願いを抱いて——。
「……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」
幾度目かさえ分からない謝罪。
その言葉を伝えるべき相手は、この憎たらしいほどに透き通った空の下には誰一人としていない——。

「――いいぜ。とびきりの美少女が謝ってるんだ、赦してやるのがいい男の甲斐性ってモンさ」

――筈、だった。

「……」

「オイオイ、幽霊でも見たような顔をしてるぜ？　こんないい男を捕まえて失礼な嬢ちゃんだな」

濡れるような月の光を一身に浴びて、赤の男がいつもと変わらぬ姿でそこにいた。

「……どうして――」

――生きているんですか？

そう問おうとして、目の前の現実が信じられずに口籠る。

その言葉の先を、果たして彼は一体どのように汲み取ったのか。

「どうして？　決まってるだろ、お転婆な家出娘を連れ戻しにきたのさ。それに――」

不敵に言ってのける彼の姿が、一瞬にして異形のモノに変わった。

「――ッ!?」

よく目を凝らして見てみれば彼の姿に異常は何もない。人間のままだ。

だが、直視することさえ憚られる汚濁の気配は決して気のせいではない。粟立つ肌と逆立つ産毛が何よりの証拠だった。

「……怖いか？」
エリゼのすぐ横に腰を下ろしながらダンテが問う。
「……」
恐ろしくないと言えば嘘になる。記憶がないままだったらきっと逃げ出していたことだろう。
だが、今は後悔（きおく）がある。故にまずはここからだ。
もう二度と大切な人を裏切らないために、エリゼは精一杯の強い語気で言い放った。
「……怖くなんて、ないです！」
「……そうかい」
「……でも——」
差し出された手を取ることが出来たなら、それは一体どれほどよかったことだろう。
「——私は戻りません。いえ、もう戻れないんです。今回はダンテが……その……人間じゃなかったから殺さずに済んだだけのことなんです。もし、ダンテじゃなかったら私は間違いなく殺していました。だから……人間じゃなくなった私はこのまま消えてしまった方が——」
「——おっと、ストップだエリゼ」
涙ながらに訴えるエリゼの独白を、ダンテの言葉が遮った。

「なあエリゼ。〝人間〟って何だと思う？」
「……え？」
その質問の意図を図りかねてエリゼは戸惑った。
だが、その有無を言わせない口調に遊びの類を感じられず、たどたどしいながらも自分の考えを述べることにした。
「……それは……やはり、私みたいに悪魔の力なんて持たない、普通の人のことではないでしょうか？」
「いいや、違う」
断定だった。
「人間は人間の身体を持っているから人間なんじゃない。人間の〝心〟を持っているから人間なんだ。誰かを想って誰かのために涙を流す。そんな〝心〟を持てるのは人間だけだ。誰のことも想わない悪魔は誰のためにも涙を流さない。涙を流せたのなら、そいつは誰であろうと〝人間〟だ」
それが例え悪魔であろうとも。
人間の〝心〟。とりわけ涙を流すことのできる〝心〟を持つ者こそが人間なのだとダンテは言った。
思い出すのは、血腥い祭壇で生贄に捧げられた時のこと。あの時自分は、人間である

筈の〝彼ら〟のことを悪魔のようだと思ったのではなかったか？
〝彼ら〟の法悦の下卑た笑みが、悪魔のそれと重なって見えた。
（……違う。私はあんな人たちとも悪魔とも絶対に違う。人を死なせて笑っていられるなんて、私には絶対に出来ない！）
彼を——ダンテを殺したと思った時の恐怖と絶望は、彼の生存を知ってもなお褪せることなく蟠っている。
殺戮に悦楽を見出す悪魔たちではこんな気持ちを持つことはないだろう。ましてや、罪悪と悲しみから涙を流すなんてことも絶対に。
「ダンテは、ご自分のことをどのように考えているのですか？」
故にこの質問は必定。
悪魔である彼が自身のことをどう思っているのか。それを聞かないことには自分の気持ちに整理がつけられない気がしたから。
「俺は人間さ」
これも、やはり断定だった。
謳うように、誇るように、自分を人間だと言ってのける様はどこまでも清々しい。
「そして、お前も人間だ。例えお前が今も、これから先も、自分のことを人間だと思えなかったとしても俺はお前を人間だと認める。俺は確かに、お前の涙を見たぜ」

敵わないと思った。
怠惰で我が儘な人だとばかり思っていたのに、こんなに頼もしく見えるだなんて。
それが、少しばかり悔しくて――目頭が熱くなる。
「ていうか、俺の顔を見たら分かりそうなもんだがなぁ。あんなブッサイクな連中と比べられること自体心外だぜ？」
「……ふふっ。そうですね、ごめんなさい」
「ようやく笑ったな」
ああ、本当に敵わない。
立ち上がったダンテが差しだしてきたその手を、しかし今度は拒まない。しっかりと握ってエリゼもまた立ち上がった。
「……ぁ」
途端に猛烈な眩暈。いや、これは眠気か？
堪らず倒れそうになった少女の矮躯を、割り込んできた逞しい腕が抱き止めた。
「……ごめんなさい、ダンテ。すごく……眠いです」
「無理もねえな。あれだけ暴れたんだ、魔力も体力もスッカラカンだろ？」
指一本動かすことさえ億劫なこの倦怠感は、きっとそういうことなのだろう。
今にも閉じられそうな瞼を必死に見開くエリゼ。

そんな彼女の視界が、唐突に真っ赤に染まった。
「乗りな」
それがダンテの背中だと気付くと同時、見計らっていたかのように一際強い眠気の波が押し寄せた。
一瞬の意識の明滅の間に、少女の身体は男の背中に背負われて宙にいた。
（……これは——）
自分にとっての父はテオ・シュバルツァーただ一人。
自分にとっての兄はリィン・シュバルツァーただ一人。
ああそれなのに——彼らを髣髴とさせる、この背中の大きさは一体どうしたことだろう？
（暖かい……）
素直にそう思った。
だが、まだこの暖かさに身を委ねる前に言っておきたいことがある。眠る訳にはいかない。
「……ダンテ。一つだけ聞きたいことがあります」
「んん？」
「……私のこの悪魔の力。これを……手放すことは出来ますか？」

「……いや、難しいだろうな」
〝あの刀〟があれば話は別だったろうが、あれは魔界に消えて久しい。
「……やっぱり。でしたら……この力の使い方を教えて……頂けませんか？」
「……一応、理由を聞いておこうか」
「……怖いからです。この力が……この力に呑まれて、また今日みたいなことになるかも知れないことが。でも……手放せないのなら、例え怖くても踏み出すべきだと思うんです。それに……破壊することしか出来ない力を、誰かを守るために使えたら……それってとても素敵なことだと思いませんか？　もしそんなことが出来たら……私はこの力を植え付けた〝あの人たち〟や悪魔たちに、中指を突き付けてやれる筈なんです。ざまあみろって……」
「お前さん、いい女になるぜ。いいね、ますます将来が楽しみだ」
「そんなの……当たり前のことじゃないですか……って、そんな風に言うということはもしかして？」
心底楽しそうに言うダンテの言葉は、即ち了承の意思表示であった。
「そこまで自分の考えを持ってるんだ。例え俺が断ったとしても食い下がるつもりだったんだろ？　なら俺はお前の頼みを容れるさ」
ダンテのその言葉までが限界だった。

「……では……どうかお願いします」
それだけをどうにか搾り出して、エリゼは安らかな眠りへと落ちていった。
「眠り姫のご帰還か。しっかりエスコートさせていただきますよ」
力の抜けた寝息を耳元に聞きながら、やや芝居掛かった口調でダンテは独りごちた。
「それにしても——〝この力を植え付けたあの人たち〟ねぇ?」
その言葉が意味することはただ一つ。
「——こいつ、記憶が戻ってやがるな」
とはいえ、彼女が眠ってしまった今はどうすることも出来まい。
彼女は何者か、何処から来たのか、それらを知るのはまた明日だ。
外に出る。
それは二か月前のあの時の焼き増しで、しかし決定的な違いがあった。
背中に息づくこの重み。その小さな身体に過酷な運命を背負わされながら、前に進むことを決めた強さに一人の人間として純粋に敬意を抱いた。
特段長い時間を共に過ごした訳ではない。だがそれでも、この少女の存在は確実にダンテの心の中に根を下ろしていたのだ。
故に彼は、彼女を背負って帰る。その重みの尊さを噛み締めるように。
二人連れ立っての家路はあの時以来だった。

身を寄せ合う彼らを祝福するかのように、中天の銀月が遍く大地を優しく照らし上げていた。

＊

「ダンテ、悪いことは言わないわ。警察に自首しましょう」
「ヘイヘイ。久しぶりに帰ってきた第一声がそれかよ、トリッシュ」

Ｍｉｓｓｉｏｎ—０３

既に日は落ちていた。
本来であれば大地を遍く照らしているはずの満月は、天蓋を覆う分厚い雲に隠されて、光の恩恵を天下に届けられずにいる。
そんな夜のことだ。
古臭い街灯のみが闇を照らすスラムの一角に佇む事務所の中で、ダンテはらしくもなくデスクワークに励んでいた。
手元を照らす作業用の灯りを手掛かりに、彼が磨いているのは黒と白の金属のパーツ達だ。
その道に精通している者が見ればすぐに分かっただろう。それらが弾丸という名の牙を持つ、鋼鉄の獣の一部であると。
「……ふうむ？　こんなところか？」
昼過ぎから始めた、らしくもないデスクワークを終えた彼の眼差しは、やはりらしくもない慎重さを孕んでいた。
何せ、今彼が手掛けているのは、生涯初となる彼自身の手によるカスタムメイドの二

挺拳銃に他ならないのだから。

——いや、少しばかり語弊があろうか。

基幹というべき設計と改造をダンテが、細かな調整とアドバイスをレディが、個人の手に余るパーツの発注をトリッシュがそれぞれ担い、都合十一組目にしてようやく完成に漕ぎつけた代物であった。

組み上げるのを待つばかりとなったそれらをもう一度取り上げて、ダンテの蒼い双眸が精査する。

命を預ける武器だ。何某かの瑕疵があってはマズいのだ。

「……おっと、忘れるところだったぜ」

そして気付く。

グリップ部分には左右一対、計四つの楕円形の不自然な窪みがあった。

ダンテは徐に脇の引き出しに手を伸ばし、そこから何かを取り出した。

金髪の美女が描かれた肖像画。それが四枚だ。

ちょうどその窪みに当て嵌まるように加工された〝それら〟——彼にとっての護りの象徴と言うべき彼の母親の肖像を嵌め込んでやる。

お膳立てはここまでだ。

最後の組み立ては、真に〝彼女〟のモノとするために〝彼女〟自身にやらせるべきだ

ろう。

「――なあ、そうだろう？　ニール？」

意志は受け継がれる。

例え血の繋がりなどなくとも、人は愛し慈しみ合うことが出来るのだから。

＊

綿密な調整を終えたパーツを片付けて、ふと室内の方へと視線を向けてみれば、仄かな光の帯が窓の外から差し込んで来ていた。

ダンテは席を外し、濡れるような光条を一身に浴びながら窓を覗きこんだ。

いつしか雲は切れ、中天の円盤がご機嫌な顔を覗かせていた。

いい夜だとダンテは思った。

こんなにも月が明るい夜は、魔なるモノどもが騒ぎだす。そして無論、それは彼とて例外ではない。

満月を視界に収めるや、肉体の奥底から突き上がる熱い滾り。首周りに残るほどよい疲労感と相俟って、彼のテンションは一気に最高潮へと昇りつめた。

とはいえ、残念ながら彼と共に情熱的なダンスを刻む相手は今はいない。

柱時計は七時半を示していた。あと十五分もすれば、命の源たるピザが届けられることだろう。

合言葉ありの依頼が早いかそれともピザが早いか、と独りごち、景気づけに軽くシャワーの一つでも浴びたくなった彼は、奥の居住スペースへと続く扉へと向かった。

まだ湯にならないうちに被ったシャワーの何と心地よいことか。

滾る熱は鳴りを潜め、徐々に暖かくなっていく水が首周りの疲れに染み透っていくようだ。

しばしの間、ゆるやかな水の流れに肉体を預けるダンテ。

それから適当に体を流し、浴室から出たところで事務所の電話が彼を高らかに呼びつけてきた。

途端、鎮まったばかりの熱が再び麗しの肉体美を駆け巡る。

——イカれた晩餐会への招待状の方が先か。

ダンテの美貌に修羅さながらの凄みが宿る。

身体を伝う水滴もそのままに、大急ぎで下着とレザーパンツを穿いた彼は、喜び勇んで事務所に躍り出た。

「——Devil May Cry」

だが、彼がご馳走にありつくことはなかった。
いつの間にか帰って来ていた同居人たる少女が、目の前でご馳走を掻っ攫っていったのだ。
「ええ……いえ、申し訳ないですが今日はもう閉店です」
そう言ってすげなく電話を切った少女が訝しげにダンテを見やった。
「どうしました？　ピザのお預けでも食らったような表情になっていますよ？」
「……オイオイ。俺からピザを取り上げてる張本人がそれを言うのかよ、エリゼ」
出鼻を挫かれたこと。そして、合言葉ありではなかったことですっかり萎えてしまったらしく、ダンテの語調からは先程までの修羅の色が欠け落ちていた。
「あら？　ストロベリーサンデーは特に制限していませんし、ピザも週一でなら食べてもいいと言っている筈ですが……ご不満ですか？」
「勿論だね。ピザは人生を潤す潤滑油さ。それを週一にまで制限されたらカリカリに干上がっちまうぜ」
「……一度本当に干上がってみますか？　きっとかつてない刺激的な境地に辿り着けると思うのですけど？」
完全に禁止すると言外に仄めかすエリゼ・シュバルツァーの言葉は、彼にとって正しく死刑宣告だった。

「……ＨＡＨＡＨＡ．〝刺激的〟っていう文言には魅かれるものがあるが、謹んで辞退させてもらうぜデビルガール」

「……ふふふふふ。洒落にならない悪口ですが、この際褒め言葉として受け取っておきましょう」

共によく似た『悪人のような笑み』を浮かべながら、三十半ばの男と十一の少女が軽口を飛ばし合う。

軽妙洒脱な会話のリズムであったが、これこそが二年と少しの付き合いで培った彼らのスタイルなのだ。

「……おや？　机にあるのはもしかして？」

「ええ、お望みのものです。ちょうど店の前で配達の方とお会いしました」

平たい箱。上面に描かれたマークの意匠は、彼にとって大変馴染み深い店のものであった。

たまらない香ばしさが鼻腔をくすぐって彼を魅了する。まさしく食欲を掻き立てるピザの芳香に違いない。

クールでスタイリッシュを気取る彼も、この時ばかりは子供のように目を輝かせる。週一にまで制限された好物を前にすればなおのことだ。

この魅惑には逆らえないし、また逆らおうとも思わない。

背後の戸棚にしまってある黒白の二挺拳銃のことなどすっかり頭の端に追いやって、焦がれた女の手でも握るかのように優しく伸ばされた指先は、しかし空しく虚空を掻っ切った。

直前で割って入ったエリゼが箱ごとピザを取り上げたのだ。

「おいおい、この期に及んでイジワルするなよ」

不満に塗れた抗議は続く少女の言葉で一刀のもとに切り落とされる。

「先に身体を拭いて下さい。まあ、貴方が掃除をして下さるなら別にそのままでも構いませんけど」

水浸しのままの姿を咎めたエリゼの視線の先で、滴が落ちて小さな水たまりを生み出した。表面塗装のせいで水分が染み込みにくいのだ。

それを見た彼女の眉が反射的に吊り上がる。

「いい男だからな。この方が映えるだろ?」

水も滴るいい男、とでも言いたいのだろうか。

確かに、三十代とは思えない引き締まった肉体を水に濡らした様子は、艶姿と言ってしまってよい。

加齢によって身についた落ち着いた色香も合わされば、きっと如何な乙女とて惑わされるに違いない。

だが、この男とそれなりの付き合いのある人間ならば決して惑わされたりはしないのだ。

「……いい加減にして下さい？」

ついには、リベリオンに顔を映して悦に入り始めたダンテに向けられたのは、彼との生活ですっかり身についた威圧のある笑顔であった。

「……Ｅａｓｙ ｄｏｅｓ ｉｔ．　落ちつけよ、何も身体を拭かないと言ってる訳じゃない」

――いつになく短気だな？　あれか、アレの日か？

そんなデリカシーの欠片もないことを思いながら、しかしその本当の原因に心当たりがあるために、ダンテはそれ以上余計な事を口走ることなく大人しく引き下がることにした。

彼女然りトリッシュ然りレディ然り、どの道キレた女性陣に勝てはしないのだ。触らぬ神というやつだろう。

すごすごと脱衣所の方へと引き下がったダンテの背を流し見つつ、エリゼはピザを手に、二階のバルコニーに続く階段下に置かれた休憩用のソファに腰掛けた。ここにしかテレビがないのだ。

中のサンドイッチを引っ張り出してから手提げ鞄を大雑把に脇に投げ出し、かなり古

い型のテレビを点ける。

〝春のボレロ〟の再放送が、今日最終回を迎えるのだ。時折ここを訪ねてくるとある友人から薦められた番組であるが、これがなかなかどうして面白い。

今夜の月の妖しさを思えば、録画の用意をした方がいいかと考えＤＶＤデッキの電源も入れておくことにした。

「……で、つまりはハズレだった訳だな？」

冷蔵庫に仕舞ってあったトマトジュースを片手に戻ってきたダンテが少女に問うた。

途端、録画の設定をし終えた少女の表情があからさまに不機嫌のそれへと変じた。

「ええ。ハズレもハズレ、大ハズレです。とんだ無駄足でした。あのヨハンという方、ご丁寧にも『魔剣文書』を始めとした――言ってしまえば基礎的な事柄を延々と垂れ流して下さいましたよ。ええ、それはもう二時間も。悪魔学者を気取っていましたけど、悪魔と出会ったことすらないただのコレクターなのでしょうね。骸骨のような外見を見た時点で中身が詰まっていないと悟るべきでした。貴重なオリハルコンまで貢いだのに……」

藤色のワンピースが汗で体に張り付く感触を嫌ってか、襟元に指を引っ掛けながら言う言葉の節々には忌憚のない呆れが含まれていた。

帰り際に中指を突き立ててやりましたよ、と笑顔で言ってのける辺りどうやら相当腹

に据えかねているらしい。
そんなエリゼの態度に苦笑を返しながらダンテもソファに腰を下ろした。
「まあ、魔界への行き方なんざ知ってる人間の方が奇特で希少だろ？　訊くなら悪魔に直接訊く方がよほど建設的だぜ」
人は潜在的に〝魔〟を怖れる。
〝魔〟に関わることを怖れない人間とは、即ち揺るがぬ強い意志を持つ者か、或いは〝魔〟に魅入られた人間を置いて他にないのだ。
あのヨハンという男、見るからに矮小極まりない彼は前者にも後者にも足り得ないだろう。
つまりは——無知。
「いや、確かにそうなんですけどね……まあ仕方有りません、とりあえず食事にしましょうか。〝彼ら〟主催のパーティーはお客様へのおもてなしがまるでなっていませんから、食事などという粋なものは出てこないでしょうし」

＊

食後の倦怠感と革張りのソファに身を預けるエリゼの翠色の双眸が、ぼんやりとテレ

ビ画面を凝視している。
既に〝春のボレロ〟は終わり、大して面白くもない次の番組が始まっていた。
（……依頼が来ないわね？）
当てが外れたかと思った途端、小さな欠伸が思わず漏れた。
「よう。お嬢さんにちょっとしたプレゼントがあるんだが、見てくれねえか？」
トイレから戻ってきたダンテの手には、何やら白い包みがあった。
カチャカチャという甲高い物音から察するに金属製の何かのようだ。
「あら？　エンゲージリングか何かですか？　私がいい女なのは分かりますが、両親の許可を得ていないので、そういうのはその内お願いしますね」
思わず口を吐いた諧謔にさも面白そうにダンテが乗った。
「……おやおやこいつは手厳しい。だがそうだな、アンタみたいに美しいお嬢さんに贈るなら、今からでも金を貯めてもっといいものを買うべきだ」
嘘偽りない本心を呟きながら、机に置いた包みを丁寧に開いていくダンテ。
中から現れた大小様々な金属片を訝しげに見つめるエリゼであったが、
「……あ……もしかして？」
すぐにその正体に思い当たり、下らない諧謔を弄したことを後悔した。
「ああ、お前のために作った力作だ。俺だと思って大事にしてくれよ？」

照れ隠しめいた洒落を飛ばしながらダンテが差し出したそれらを、エリゼが僅かに震える指先で摘みあげた。

——SCHWARZ&WEISS——

スライド部分と思しきパーツの片面にはこのように彫られていた。

シュヴァルツ&ヴァイス。ドイツ語で黒と白を意味する言葉。

ヴァイスのSSの綴りは、おそらくエスツェットという文字に馴染みがなかったが故なのだろう。

外観のモデルは、元の形を大きく逸脱しているが、エボニー&アイボリーと同じコルト・ガバメントを参考にしている。

そして、例えば連射性能を重視して採用したリングタイプのハンマーや精密射撃を重視した可変式のサイトなど、エボニー&アイボリーに施された創意工夫を踏襲しつつ、少女に合わせた調整が成されているのだ。

例えば——。

連射重視の右手専用拳銃——アイボリー。

精密射撃重視の左手専用拳銃——エボニー。

ダンテとエリゼの利き手の違いからそれぞれの役割を入れ替えた。

即ち、連射重視のヴァイスを左手用に、精密射撃重視のシュヴァルツを右手用に。

少女――ひいては女性の手による銃把の保持を確実なものにするために、エボニー＆アイボリーのような複列弾倉ではなく単列弾倉を採用し、それによる弾薬数の減少を補うために銃把をやや延長させている。

そうして生まれた、エボニー＆アイボリーの兄妹銃とも父娘銃とも言える二挺の拳銃。

武器としても工芸品としても、いっそ黄金比とさえ言って過言ではないエボニー＆アイボリーを生み出した〝芸術家〟の腕と魂に、改めて敬意と感謝を抱きながら完成へと漕ぎつけたそれが今、少女の手の中で形を成す。

銃の銘が刻まれた側とは反対の側面にはこうある。

――ＦＯＲ　ＥＬＩＳＥ　ＳＣＨＷＡＲＺＥＲ――

――ＢＹ　ＤＥＶＩＬ　ＭＡＹ　ＣＲＹ――

「……」

言葉は、なかった。

ただ、何かを確かめるようにその文字をそっと優しく撫でた。それだけで十分だった。

ちょうどその時のことだった。

依頼の到来を告げる甲高い鈴の音が空気を震わせた。

思わず見合わせた二人の美貌に、次の瞬間、酷薄な色香が燻り始める。
受話器を取ろうと立ち上がったエリゼを制したダンテが、奪い取るかのような勢いで一気に受話器を撥ね上げた。
「Ｄｅｖｉｌ　Ｍａｙ　Ｃｒｙだ」
電話の向こうの何某かが震えあがる様子がありありと想像できる、昏い情動を孕んだ冷たい声音だった。
言葉を交わすダンテの表情が目に見えて豹変していく。
双眸に宿る光は僅かに触れただけで斬られてしまいそうな刃の冷たさへと変じ、口角は肉食の獣さながらの危険な角度を描きつつあった。
そんな彼の気配に呼応するように、その手の黒白を弄ぶ少女の表情もまた、どこか歪で艶やかな魔性美を帯びていった。
常の彼女ならば絶対に見せることのない笑みは、嗜虐と蠱惑の色で満ちており、その〝趣味〟ではない男であっても一も二もなく惑わされていたことだろう。
常ならぬ少女の態度は、彼の骸骨野郎に対する不満だけが原因ではなかったようだ。
月の光を受けて生まれた少女の影は、人ならざるモノのカタチをしていた。
「――Ｊａｃｋ　Ｐｏｔ」
この店でのみ通じる魔法の言葉が、イカれたパーティーの幕開けを告げた瞬間だっ

た。